

# 国立公文書館所蔵『寺門事条々聞書』

— 附、国立公文書館所蔵『長専五師記写』 —

末 柄 豊

国立公文書館所蔵大乘院文書のうちに含まれる『寺門事条々聞書』<sup>(1)</sup>（古二二三六七一〜三）は、室町前期の興福寺学侶長専（南戒壇院、堯観房）の日記を、室町後期の同寺学侶朝乗（妙音院、舜実房）が、文明十一年（一四七九）に抄出したものである。その記録年代は、応永六年（一三九九）から同二十八年におよび、うち七分分について記事がある。

同記の応永二十一年六月二十三日条に見える興福寺官符衆徒および大和国民の交名について、早く永島福太郎がその著『奈良文化の伝流』<sup>(2)</sup>のなかで紹介したことにより、大和武士の研究に関する基本史料のひとつとして知られるに至っている。しかし、全体として室町前期における幕府と興福寺との関係を検討するための絶好の史料であるにもかかわらず、従来十分に活用されていないように思われる。その理由の一半は、すでに相当の部分が『大日本史料』第七編のなかに収載されているものの、分載のため通読が困難であり、さらに、応永二七・二八兩年の分は同書が未刊であるため、その全体像を知るには写真版に就くしかないことにあると考えられる。

そこで、同じく長専の日記のうち応永六年から十年の分について、室町中後期の興福寺大乘院門主尋尊（『大乘院寺社雑事記』の記主）が応仁三年（一四六九）に抄出した『長専五師記写』<sup>(4)</sup>（国立公文書館大乘院文書、古二二三六八）とあわせて全文を翻刻する。

まず、八寫幸子「大乘院文書」目録<sup>(5)</sup>にもとづき両書の書誌を確認しておく

う（なお、表紙の墨書および奥書については、釈文を参照されたい）。

- 寺門事条々聞書（第二冊） 袋綴冊子、縦二六・〇糎、横一八・一糎、紙数四五丁、文明十一年写、紙背文書なし、収載年代応永六年至十年・二十一年、
  - 寺門事条々聞書（第二冊） 袋綴冊子、縦二三・七糎、横一七・〇糎、紙数四八丁、江戸時代写、紙背文書なし、収載年代第一冊に同じ、
  - 寺門事条々聞書（第三冊） 袋綴冊子、縦二五・七糎、横一八・〇糎、紙数四二丁、文明十一年写、紙背文書あり（四二丁のみ）、収載年代応永二十一・二十七・二十八年、
  - 長専五師記写 袋綴冊子、縦二八・四糎、横三二・五糎、紙数二三丁、応仁三年写、紙背文書（応仁二年文書）あり、収載年代応永六至十年、
- 第二冊は、第一冊の転写本なので、『寺門事条々聞書』は実際上は二冊だと考えて差し支えない。このほか、お茶の水図書館所蔵成實堂文庫大乘院文書にも、第一冊および第三冊を江戸時代に書写したものが『朝乗記之写』<sup>(6)</sup>という名称で伝存しており、近世の大乘院門跡において複数の副本が作成されていたことがわかる。

『寺門事条々聞書』は、現在は二冊しか伝存していないが、朝乗が抄出した際には三冊本であった。すなわち、第一冊・第三冊とも原表紙の右肩に、朝乗自身の手で「三帖之内」と記され、さらに、第一冊・第三冊とも最終丁表面の右端つまりノドの部分には、天文二年（一五三二）英重なる者が記した感得奥書があ

り、「三帖之内上」および「三帖之内中」と見えているのである。つまり、朝乗が三冊にまとめたもののうち、上・中二冊が現存し、下冊が失われてしまったということになる。なお、英重が何者か、あるいは、その後どのような過程を経て大乗院門跡が所有するに至ったかは不明である。

一方、尋尊の抄出した『長専五師記写』は、年代的に『寺門事条々聞書』第一冊と重なっているが、両者とも抄出なので、相互に補いあう関係になる。たとえば、朝乗は応永九年については一切記事を写さなかったが、尋尊は写しているといった具合である。また、同じ記事を写してあっても、省略する部分が異なるので、あわせて見る必要がある。

『寺門事条々聞書』・『長専五師記写』の両書とも首題は「応永六年卯雜々聞書」であり、長専自身による同記の呼称は「雜々聞書」であったと考えられる。『寺門事条々聞書』の名は、原表紙外題に「寺門事条々聞書長専日記」と記されており、朝乗が抄出した際に付与したものだと思われる。『長専五師記写』の名は、近世に大乗院門跡で記録類を整理した際に新加したと思しき表紙に載せる外題によったもので、本来のものではない。しかし、尋尊自身が原表紙の外題に書付けた書名は、朽損によって「抄自長専永六年至十一年、長専五師記録趣也」としか見えておらず、不明である。

記主長専は、応永五年に作成されたと判断できる興福寺寺僧の交名において、「長専年四十四」と記されているので、延文四年（一三五九）に誕生し、永和元年（一二七五）に受戒したことがわかる。応永二十二年の維摩会（康暦元年分）において寺分堅者として遂業し、同二十四年の正月には別会五師として見えるので、おそらく同二十三年のうちに五師となったのであろう。『寺門事条々聞書』応永二十七年五月晦日条には、五師三臈として見える。さらに、永享元年には五師一臈で、僧官位も僧都に達していたことが知られる。<sup>(10)</sup>この時、七十一歳であった。また、遡って応永十一年には、祈雨の祈禱の際、当時の興福寺別当大乗院孝円から、「能書たるに依」って願文の清書を命じられている。<sup>(11)</sup>このような経歴からみ

て、長専は興福寺学侶として有能な人物であったと考えてよからう。

『寺門事条々聞書』は、抄出であるにもかかわらず豊富な内容を有しており、長専はきわめて詳しい記録を残す人物だといえることができる。そのためか、このうち、興福寺内において、主として五師を勤める者たちにより、その日記がしばしば参看されていたことが確認される。<sup>(12)</sup>そして、『寺門事条々聞書』を抄出した朝乗も、のち五師となり僧都に至っている。<sup>(13)</sup>

また、尋尊は『長専五師記写』を抄出する以前にも、長専の日記について別の部分を書写している。同じく国立公文書館所蔵大乗院文書のうちの『室町殿御断延年等日記』（百二十四二七）がそれにあたる。永享元年（一四二九）九月の足利義教の南都下向について記録したもので、延年に関する詳細な記載があることから、芸能史では著名な史料だといつてよい。<sup>(14)</sup>その奥書は以下のとおりである。

此一帖、令借成身院光宣法印、書写了、  
寛正四年三月九日  
（大乗院尋尊  
花押）

此記者、南戒壇院長専五師之日記、方々儀付才覚、為寺門興立記之云々、則永享元年五師随一也、去々年可有御下向由、及御沙汰之間、此記寺門方々仁写取之了云々、就当年御下向、大切子細在之、

尋尊は、寛正四年（一四六三）成身院光宣から借用して書写したが、同六年に実現する足利義政の南都下向について、その動きが同二年からあったため、興福寺内で参照すべきものとして多数の人々に書写されたという。長専の日記は、早い時期から興福寺内で著名だったのだろう。

内容については、はじめに書いたような政治史研究上の関心を満たしてくれているものであるのと同時に、当然のことながら、興福寺内の組織・運営についても興味深い記事が存在している。たとえば、長専が別会五師として携わった応永二十八年三月の三蔵会の記事は、田中稔がかつて「東大寺文書にみえる自連（宇連）と請定」<sup>(15)</sup>で指摘した問題について、具体的な運営の場面から検討を行うための格好の材料だと思われる。また、朝乗と尋尊との抄出する記事の相違から、そ

それぞれの関心のありようを探ることや、抄出法の特徴を明らかにすることが可能だと思われ、史料論の見地からも、検討の余地は大きい。たとえば、応永八年閏正月条に見える国民十三人の交名について、『寺門事条々聞書』に就けば、幕府が大和國中重反銭未済者の譴責を行う使節に指名した者だと知られるが、『長專五師記写』のみを見れば、重反銭未済者の交名だと解してしまう。つまり、尋尊の節略が過ぎているということなのだろう。さらに、『長專五師記写』は、『大乘院日記目録』と対照すると、その編纂材料に用いられたことが明らかであり、尋尊の資料収集について考える手がかりともなるのである。

〔註〕

- (1) 東京大学史料編纂所架蔵写真帳（以下、史料写真帳のように略す）『大乘院文書』九一による。
- (2) なお、彰考館文庫所蔵『興福寺日次記』（『大日本史料』七編之二十、二一八〜二二五頁）もこの交名を載せている。同記は、当時興福寺別当であった東院光暁の日記を抄出したものだと思う。
- (3) 永島福太郎『奈良文化の伝流』（中央公論社、一九四四年）四五〜四七頁。
- (4) 史料写真帳『大乘院文書』九二による。
- (5) 八寫幸子「大乘院文書」目録『北の丸』三五号、二〇〇二年。
- (6) 史料レクチグラフ『成實堂古文書』一〇による。荻野三七彦編『お茶の水図書館蔵『大乘院文書』の解題的研究と目録』上（お茶の水図書館、一九八五年）一一三〜一一四頁。
- (7) （応永五年）興福寺僧交名（第一紙は、『教王護国寺文書』七六九号、第二紙以後は、『東寺百合文書』に函三三三三号）。同交名は、大乘院孝円を二十一歳、慈恩院兼覚を三十九歳、東院光暁を三十八歳と載せており、この年齢を『三會定一記』に見える各人の年齢と照合すると応永五年のものだと確定できる。
- (8) 『三會定一記』。
- (9) 『東院毎日雑々記』別記四（『大日本史料』七編之二十八、二八三〜二八四頁）。
- (10) 『室町殿御断延年等日記』永享元年九月二十三日条。後註14参照。
- (11) 『寺院細々引付』応永十一年八月十一日条（『大日本史料』七編之六、七五三〜七五六頁）。
- (12) 『多聞院日記（のうち学賢房宗芸記）』文明十六年六月一日条ほか。なお、同記文明十七年正月十三日条は、「長專并頭融ハ随分之仁也」と記している。『蓮成院記録

- (13) 『のうち頭実房印尊記』天文二年十二月二十六日条。
- (14) 朝乗については、末柄豊『後鑑』所載「南都一乗院文書」について（科学研究費補助金研究成果報告書『興福寺旧蔵史料の所在調査・目録作成および研究』〔研究代表者上島亨、二〇〇二年〕を参照）。
- (15) 桑島禎夫によるコロタイプ複製が別冊解説つきで一九六一年に刊行されている。桑島禎夫『室町殿御断延年等日記』（『史学文学』三卷三号、一九六一年）も参照。また、『日本庶民文化史料集成』二（三一書房、一九七四年）にも、永島福太郎氏の手になる翻刻・解題がある。
- (16) 田中稔「東大寺文書にみえる自連（字連）と請定」（同『中世史料論考』（吉川弘文館、一九九三年）所収、初出は一九九一年）。